

## トゥラガ・ネイション（その1）：ヴァヌアツにおける新しい伝統復興運動

吉岡政徳

（放送大学兵庫学習センター客員教授）

### はじめに

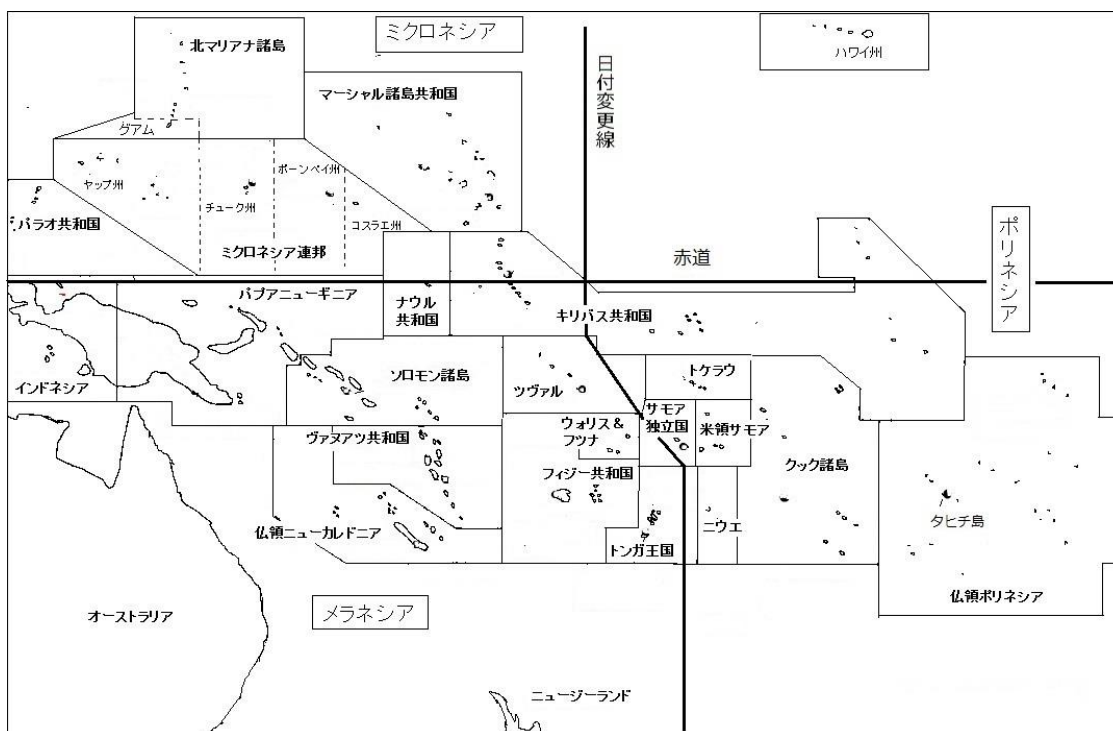
トゥラガ・ネイション(*Turaga Nation*)というのは、ヴァヌアツ共和国ペンテコスト島北部の東海岸にあるラヴァトマンゲム村を中心に展開されている一種の社会運動である。新聞やネットを介して様々な紹介がなされてきたが、その多くは、トゥラガ・ネイションは伝統文化を復興させることを目指している先住民運動であるというものである。というのは、本拠地であるラヴァトマンゲム村には、伝統経済の自立を目指して伝統的財である豚の牙を保管する「銀行」が作られ、伝統を教える学校では、西洋のアルファベットとは異なるペンテコスト島北部独自の文字が教えられているからである。さらに、リーダーのヴィラレオ・ボボレンヴァヌア氏（以下、名前の場合は氏は省略）は、裸に禪という伝統的な衣装でマスコミに登場することが多く、実は国際会議などの場でも伝統的ないで立ちで講演をしてきたという。これらのことが、この運動を伝統復帰の先住民運動と位置付けさせてきたのである。

トゥラガ・ネイションには、もう一人リーダーがいる。公的には、トゥラガ・ネイションのチーフであり広報官といわれているモタリラヴォア・ヒルダー・リニである。彼女は、ヴァヌアツ独立運動のリーダーで初代首相のウォルター・リニの妹であり、パプアニューギニア大学でジャーナリズムを学んだ後、1987年、ヴァヌアツで最初の女性国会議員に選出されている。彼女はその後いくつかの大臣を歴任し、ヴァヌアツの近代化の旗手として国際的に活躍してきた。そして、ヴィラレオを国際舞台に登壇させ、ヴァヌアツの先住民活動について世界に発信してきたのも彼女なのである。

伝統文化の復興を叫び伝統的な衣装に身を包んだヴィラレオと、近代化の旗手として活躍してきたヒルダー・リニ、この二人が進めるトゥラガ・ネイションとはどういうものなのか。伝統と近代の相克という視点から、あるいは人類学におけるカスタム論の側面から考えても極めて興味のある運動であるが、実は、この運動は2015年をもって活動を休止している。というのは、リーダーのヴィラレオが同年に、他人の家を焼き払ったかどで逮捕され、2019年9月現在も獄中にいるからである。

筆者は長年ペンテコスト島北部を対象にフィールドワークを重ねてきたが、村人からは、この運動についてごくまれにしか話を聞くことはなかった。つまり、人々の間であまり大きな話題となっていなかった。しかし2003年に、筆者は偶然都市部で活動をするヒルダー・リニとヴィラレオに遭遇して以来、彼らの活動に関心を向けるようになった。そして2019年、ようやくこの運動の本拠地であるラヴァトマンゲム村を訪

れる機会をもった。そこで資料収集にあたったが、残念ながら研究論文などはなかったため、マスコミやネットで報道されているトゥラガ・ネイションについての資料を集め、ヒルダー・リニのインタビューを取り、村に向かった。ヴィラレオの不在の村は閑散としていたが、丁寧に管理されており、ヴィラレオが戻ってくるのを待っている状態だった。しかし新聞などでは、ヴィラレオが逮捕されたことにより、トゥラガ・ネイションの活動は終わってしまうのではないかと、という報道がなされていた。



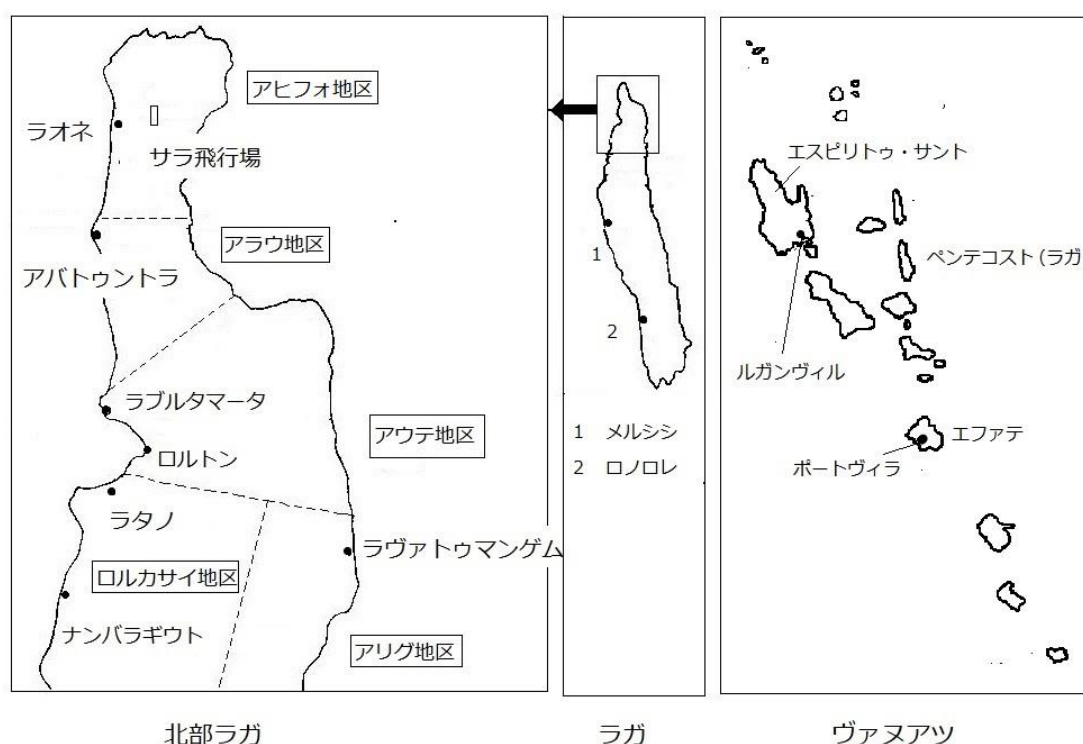
地図1 オセアニア

本稿の目的は、現在は活動を休止しているが、トゥラガ・ネイションが行ってきた独自の文字の作成、先住民議会運動、そして「豚の銀行」の実態を、マスコミなどの資料とフィールドワークにもとづいた資料によって、詳細に記述することである。なお、伝統経済の自立に関する政府の指針とヴィラレオの視点、ヴィラレオ逮捕とその後の裁判で明らかになった彼の伝統に対する考え方、ヴィラレオとは微妙なズレをみせるヒルダー・リニの思想については、カスタム論との関連での分析も踏まえて、「トゥラガ・ネイション (その2)」で論じる。

## 1 ペンテコスト島北部の社会文化的状況

南太平洋のメラネシアに位置するヴァヌアツ共和国は、1980年イギリスとフランス

の共同統治から独立したマイクロステートで、2016年のミニ・センサスによると人口は27万人である。南北にY字に連なる島々からなり、中部のエファテ島に首都ポートヴィラ(人口51000人)がある。この首都と、北部のエスピリトゥ・サント島にある町・ルガンヴィル(人口16000人)の二か所がヴァヌアツの都市部を形成しており、他の地域は基本的に農村地域である。人々はタロイモやヤマイモなどの根菜類を生産する農耕民で、現在でも農村地域では自給自足が成立しており、国家としては貧困国として位置づけられているが、実際の人々の生活は、飢えのないある意味「豊かな」生活だといえる。国家は大統領を頂点とする共和制をとっているが、大統領は象徴としての意味が強く、政治の実権は首相に与えられている。



地図2 ヴァヌアツ、ラガ（ペンテコスト）島、北部ラガ

英仏共同統治という珍しい植民地統治を経ており、独立前も独立後も、様々なものがイギリス系とフランス系に分かれて対立してきた。その痕跡は現在でもキリスト教の宗派や学校に残っている。つまり、カトリックはフランス領であったニューカレドニアから入ってきたため、カトリックが布教された地域ではフランス語を基盤とする学校教育が行われる一方、非カトリックであるアングリカン（英国国教会）やプレスビテリアン（長老派）はオーストラリアやニュージーランドを経由して布教され、英語を基盤とする学校教育が行われてきた。その結果、英語とフランス語の両方が公用

語としての地位をもつことになったが、都市部で人々が会話をするとき一般に用いられているのは、ビスラマ(bislama)と呼ばれるピジン語である。ヴァヌアツはメラネシアの例にもれず言語単位の小さなところで、全土で 100 を超える言語が話されている。したがって、共通語としてのリングア・フランカであるピジン語が発達し、都市部ではビスラマを母語とする人々も存在している。

さて、ヴァヌアツ北部に浮かぶペンテコスト島は、南北 60km、最大幅 10km ほどの縦長の島であり、大きくは北部、中部、南部と三つの言語圏に分かれている。ペンテコスト島は、北部と中部の言語でラガ(Raga)と呼ばれており、トゥラガ・ネイションのトゥラガは、「ラガに立つ」という意味をもっている。2009 年のセンサスでは、島全体の人口は約 17000 人、北部は 6000 人である。なお、北部の人々のほとんどはアングリカンの信者であるが、ラタノ村周辺だけはカトリックの影響下にある。

ペンテコスト島北部（以後北部ラガと呼ぶ）は、ヴァヌアツの近代化で大きな役割を演じた地域であり、リニ兄弟（ヴァヌアツの独立を指導したウォルター・リニ、第 11 代首相を務めた弟のハム・リニ、そしてヒルダール・リニ）を始め<sup>(1)</sup>、アングリカンのヴァヌアツ教区で、最初のヴァヌアツ人ビショップとなったハーレー・テヴィなど特筆すべき人物を輩出している。その一方で、伝統文化に対する自負心の強い地域でもある。人々のいうカストム(kastom)、つまり伝統<sup>(2)</sup>の中核にあるのが、階梯制という社会政治制度である。北部ラガには現在四つの階梯があり、男たちは「豚を殺すこと」と「豚を支払って各階梯にふさわしいとされる記章を購入すること」で、階梯を登っていく<sup>(3)</sup>。最上階梯に到達した者は、チーフ(ビスラマで jif、ラガ語で ratahigi)と呼ばれて、伝統的な政治的リーダーとみなされる。各村落には最上階梯に到達した男たちが複数存在しており、彼らチーフたちの合議で村落政治が遂行されている。

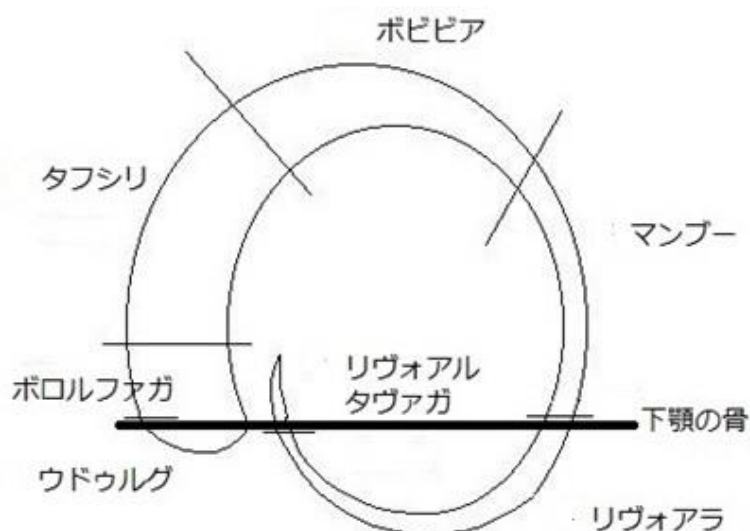


図1 豚の牙

階梯制は、ボロロリ(*bolololi*)と呼ばれる儀礼の中で具現されていく。つまり、この儀礼の中で豚を殺したり、豚を支払って記章を購入したりするのである。階梯制については、すでに詳細な民族誌を著しているのでここでは省略するが(吉岡 1998, 2018)、北部ラガにおける伝統的な財については、説明しておく必要がある。北部ラガには、伝統的な財として豚とパンダナスで編んで赤く染めたマットが存在する。赤いマットは、全長 4mほどの大きなマットと、伝統的な衣装である禪や腰巻として用いられる全長 1.5mほどの小さなマットの二種類がある。豚には牙が生え、牙の大きさに応じて等級が定められていると同時に(図 1)、それぞれを交換可能にするレートも定まっている。これらの豚はパンダナス製の赤マットと交換可能であり(表 1)、二種類の財は、家を建ててもらったときのお礼や畑の産物を大量に購入するとき、あるいは村落で課される罰金刑などで支払いに用いられてきた。つまり、これらは「伝統的な貨幣」として流通してきたといえるのである。

表 1 リンギリングアーナ(豚とマットの交換儀礼)における交換レート

豚の等級	等価のマット
ウドウルグ	赤大マット 1
ボロルファガ	赤大マット 2 + 赤小マット 5 または 10
タフシリ	赤大マット 3 + 赤小マット 10 *
ボビビア	赤大マット 4 + 赤小マット 10
マンブー	赤大マット 5 + 赤小マット 10
リヴォアラ	赤大マット 6 + 赤小マット 10

\*赤大マット 1 枚と赤小マット 10 枚は等価<sup>(4)</sup>

さてヴァヌアツは、国家の設立当初から、伝統的な事柄を協議する全国チーフ評議会(National Council of Chiefs)なるものを設けて、近代に関することは国会で、伝統に関することはチーフ評議会を決めるというやり方をとってきた<sup>(5)</sup>。そのため北部ラガにも、地方行政をになう地方政府とともにチーフ評議会の地方組織も存在する。北部ラガのチーフの多くはこのチーフ評議会の地方組織に参加しており、首都のチーフ評議会の命令系統下に入っている。したがって、各村のチーフ達は地方政府の行政範囲に介入したり、首都のチーフ評議会の判断を超えて動くことは原則的にはないが、村落レベルの出来事、例えばちょっとした窃盗やもめ事などに対する裁定、村落活動の指針、また階梯制に関する諸儀礼、婚姻儀礼、葬送儀礼など伝統的な事柄などに関しては、自らが自由に決定する権利をもっている。

筆者が初めてこの地を訪れたのは 1974 年であり、サラ飛行場はまだ建設されておらず、南部のロノロレ飛行場からトラック、ボートを乗り継いで北上した。当時はアバ

トゥントラ村が北部ラガの行政の中心であった（地図2参照）。様々な交渉の末、筆者はラブルタマータ村に定着しフィールドワークを行ったが、以後、2019年に至るまで断続的に行ったフィールドワークでも同村が拠点となっている。

島は東西に切ると台形の形をしており、西の海岸から急に斜面となり、それを上り詰めると比較的平らな状態が続き、やがて東海岸に近づくと再び急な斜面になるという形態をとっている。したがって、人々の農地は比較的平らな内陸部に作られており、トラックの通ることができる大きな道も、島の内陸部を走っている。その結果、近代化の波は内陸部の方に早く訪れることになった。筆者の滞在してきたラブルタマータ村は、島の西海岸に面したところにあるが、ラガ島の西側の海は島々に囲まれているため、「静かな海(*tahi mate*)」と呼ばれるほど穏やかな状態であることが多い。一方、島の東海岸は外洋に直接さらされるため「荒れた海(*tahi mauri*)」と呼ばれている。常に大きな波が打ち寄せる状態であり、沖にある岩礁のせいもあって、ボートを岸につけるのは簡単ではない状態だ。トゥラガ・ネイションの本拠地であるラヴァトマンゲム村は、この東海岸に面して立地しているのである。



写真1 高台にある焼き畑の農地から見たアリグの海岸

## 2 アヴォイウリ：ラガ独自の文字

筆者は、1974年、東海岸のアリグ地区で祭りがあるというので、ラブルタマータ村から踏み分け道を歩いてアリグに行ったことがある。4時間ほどの行程だった。場所は、当時はまだ存在しなかったラヴァトマンゲム村の位置よりもさらに南下したとこ



ろの村だったが、そこで、カスタム・レター(kastom leta : 伝統的な文字) の存在を教  
えてもらった。砂に描く一筆書きであるが、鳥や虫、貝や木の実など様々なものを示  
している砂絵である。これをもとに、後年、トゥラガ・ネイションで用いられるラガ

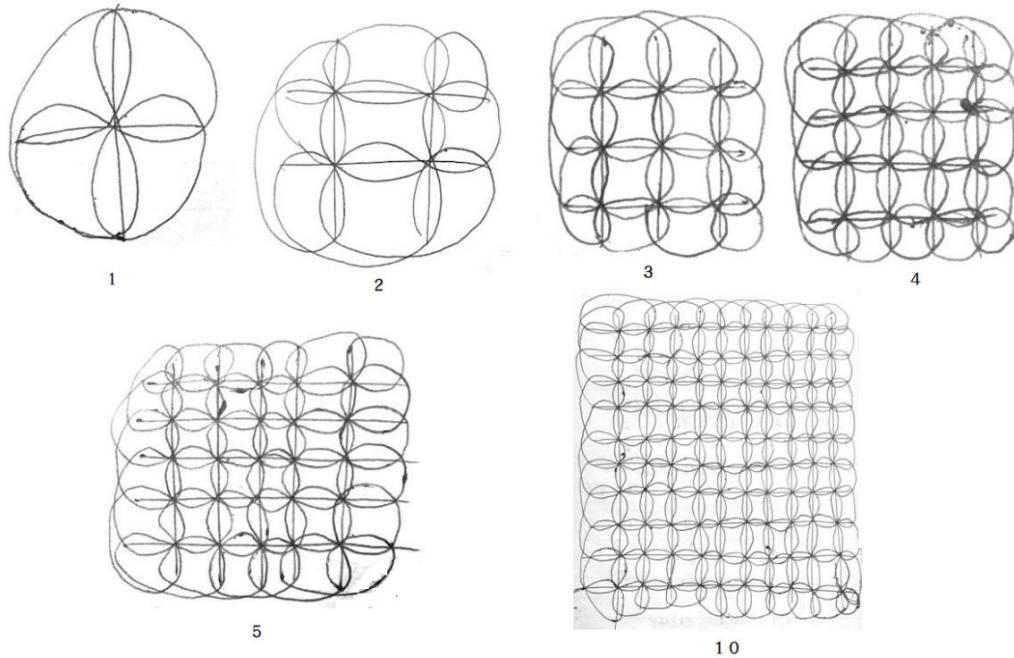


図2 砂絵による数

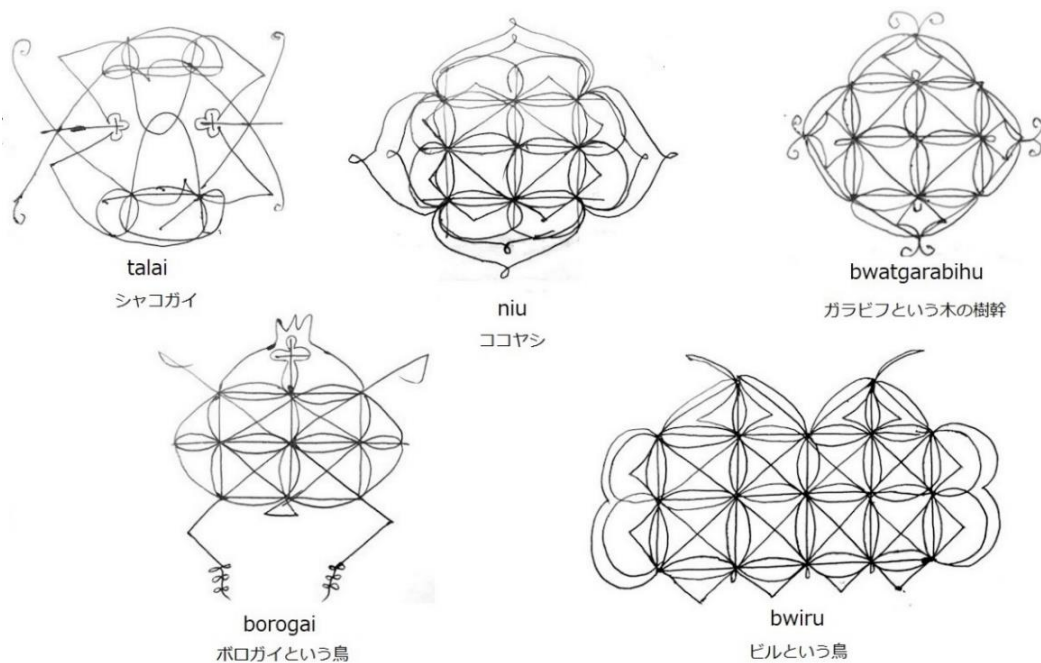


図3 砂絵の例

独自の文字が考案されるのであるが、この当時でも人々がビスラマでカスタム・レターと呼んでいたことを考えれば、これを「絵(uli)」ではなく「レター(leta: 文字)」と考える方向性はあったのかもしれない。1から10までの文字として教えてもらったのが図2である。この図は、正確には砂絵1つ (bwatiuli gaituvwa)、砂絵2つ(bwatiuli gairua) という具合に数えて10まで描いたもので、数字の1から10を示しているわけではない。なお、砂絵は北部ラガで（そしてひいてはヴァヌアツ中で）広く知られており、筆者は後にラブルタマータに戻ってもっと多くの砂絵を教えてもらった。そのごく一部が図3に示してある。

1997年のフィールドワーク時に、筆者は、砂絵をもとに二人の若者がラガ独自の文字を作り出そうとしているという話を聞いた。このころから考案されてきたラガ独自の文字、つまりヴィラレオがいうアヴォイウリ(avoili)を、図4に示してある。北部ラガで話されているラガ語は、欧文から借用されたアルファベットを用いて表記するのが一般的であるが、c、f、j、p、q、x、y、zの文字は使わない。独自のものとしては、[ng]を示す  $\bar{n}$  と[ngg]を示す  $\bar{g}$  が存在するが(Yoshioka 2013:6-15)、これらの文字は図4のラガ文字でも特別に作り出されている。

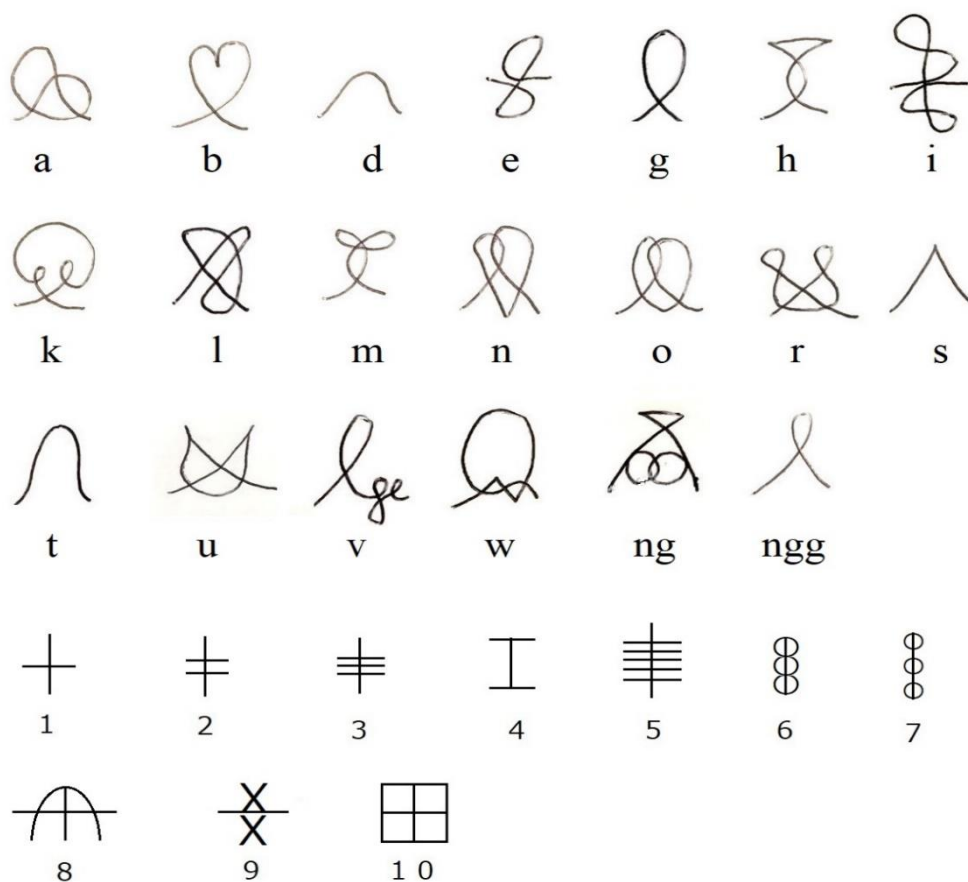


図4 アヴォイウリ



多くの砂絵は、まず縦横に線を井桁状に引いてから、線を描いていく。その縦横の線の数が、図2の場合の「数」と合致する。そして、図4を見れば分かるように、ヴィラレオたちが考案したラガ文字の数字は、この井桁上の線を一部採用しているようである<sup>(6)</sup>。

さて、2003年にエスピリトゥ・サント島のルガンヴィルの目抜き通りで、偶然にもヒルダー・リニとヴィラレオに遭遇した。そのとき彼にもらった名刺が図5である。表はラガ文字で書かれており、裏に英語で MELANESIAN INSTITUTE OF PHILOSOPHY & TECHNOLOGY, Lavatmagemu, Turaga nation, Northeast Pentecost, REPUBLIC OF VANUATU と印字されていた。図4を参照して図5の名刺に書かれた文字をアルファベット化すると、上から Vanuatu、Arorooa、Turaga、Lavatmanggemu、Bwatieren vovoraga gotovigi となる。最後の言葉は、英語版の Institute of philosophy and technology に当たるが、二つ目の Arorooa が、英語版の Northeast Pentecost を指すようである<sup>(7)</sup>。

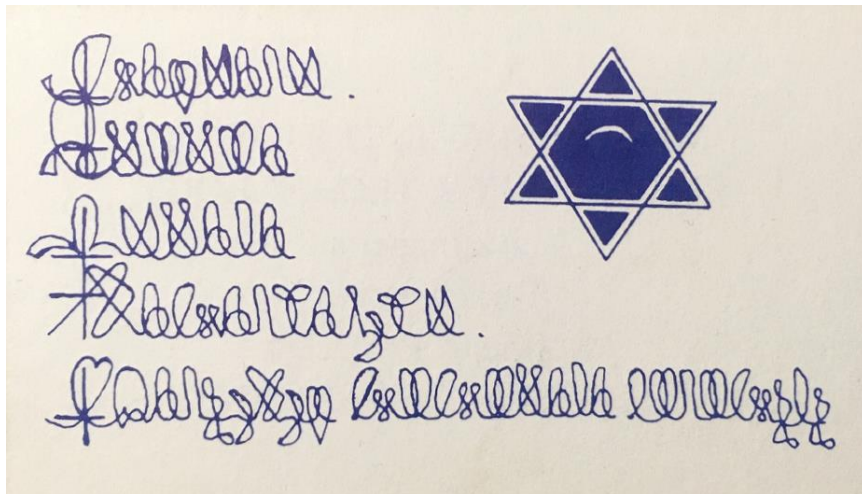


図5 ヴィラレオの名刺

ところで、文字を新たに作り出すという行為は、極めて政治的な色彩を伴っている。たとえば、ビルマに出現したカレンニー文字は、旧カレンニー州（現カヤー州）の分離独立を主張する反政府組織が、カレンニー州内の諸民族を団結させ、政府のビルマ化政策に対抗すべく作り出したものである。カレンニー文字は、いわば、カレンニー州内の諸民族がビルマから分離独立するための一つの装置であったのだ。しかし、ビルマでの民政移管によってこの組織と政府の間で停戦合意が実現し、政治体制が安定してきてからは、様相が変わってきた。もともとカレンニー文字は、州内の諸民族の中のマジョリティを占めるカヤーの言語をもとに練りだされたものであったが、停戦後は、カレンニー文字は分離独立のための装置であることをやめ、カヤー民族のプレゼンスを高めるためのカヤー文字として再認定されることになったという（久保

2020:178-185)。

このカレンニー文字がもつ二重の政治性(反政府行動のための州内の諸民族の団結、そして、州内の諸民族間でのマジョリティとマイノリティの対立)は、トゥラガ・ネイションの作り出したラガ文字にはない。その文字は、ラガ語の欧文アルファベット表記への反発から生まれたものであり、西洋の影響から抜け出すための装置としての役割を持っている。しかし、ヴァヌアツには100を超える言語が存在しており、それらは互いにマジョリティ/マイノリティという関係性を持たず並列関係にあるため、一語圏で発明された文字が他の言語圏すべてに適用されるということは起こりにくい。さらにトゥラガ・ネイションは、ラガ文字を、ラガ語を話す人々の「民族的自覚」を高めるために作り出したというよりは、他の言語圏でもそれぞれに見合った新しい文字を作り出すことを誘発し、ヴァヌアツ全体として欧文アルファベットによる文字から脱出する道を探っているように思える。

トゥラガ・ネイションが訴えているのは、自らの伝統文化を再認識し西洋の影響から抜け出すことであり、その一つの例として北部ラガではその伝統文化に即した独自の活動を展開しているということであった。ところが、独自の文字の発明は、以下で述べる、伝統に根差した「先住民議会」設立の呼びかけや、伝統経済の自立を目指した「豚の銀行」の設立という活動と連動して行われたため、西洋からの影響を強く受けて国家づくりをしてきたヴァヌアツ政府にとっては、あたかも反政府的な政治組織であるかのように映ったことも確かなのである。

### 3 先住民議会(Indiginas Palamen)<sup>(8)</sup>

2003年にヒルダー・リニとヴィラレオがセント島のルガンヴィルに来たのは、この地に集まったチーフたちに、先住民議会というものを説明するためであった。先住民議会というのは、トゥラガ・ネイションの動きと連動したもので、伝統的手続きでチーフになった人々が自らの手で政治をやっていこうという運動であった。筆者はこのとき、ルガンヴィルでの調査を終えて首都に帰る直前であり、ルガンヴィル在住の北部ラガ出身者が送別会としてのカヴァの宴<sup>(9)</sup>を開いてくれることになっていた。そして、ヴィラレオ達が会議を開く場所も、たまたま筆者の送別会をしてくれる人々のいる場所だったのである。その結果、彼らの先住民議会を説明する会合に筆者も出席することになってしまった。そのあたりの状況を、長くなるが、当時の日記から引用しておこう。

昼食から帰って町を歩いていると、「ヨシオカ！」と声をかけられた。「イナウ・ヒルダー(私、ヒルダー!)」と言う。確かにヒルダーだった。リング(ウォルター・リニ)と同じような顔をしている。パプアニューギニア大学にいたころの娘

さんとはわけが違う。貫禄もあり、なかなか立派だった。ロラムハウス（ルガンヴィルの商店）の前で会うが、彼女は禪姿の若い男と一緒にいた。これが、ヴィラレオ。サイモン（送別会の主催者である北部ラガ出身者）が「タイに行ったときに禪だけで豚の牙を胸から下げて歩いて、みんな驚いた」と自慢気に話していたヴィラレオだ。・・・ヴィラレオはホテル・サントに泊まっているらしいが、ヒルダーも一緒なのだろう。彼女は今フィジーにいたといていた。サイモンが、「ヴィラレオがラフシヴァトゥ（送別会をしてくれる地区）に来る」と言っていたので、彼と一緒にカヴァを飲むのかもしれない。彼らと別れてナタポア（筆者の宿泊先）に戻り、荷造りをしてそれからチェックアウトを先にすませた。

・・・5時ころに、ラフシヴァトゥに向かう。・・・ナカマル（集会所）へ向かった。ところが、そこにはヴィラレオとヒルダーがいて、なにやらぼそぼそと話している。ヒルダーも一緒にカヴァの宴に参加するのか、と思いつつサイモンを探すが、いない。ヴィラレオが「こっちに来い」と言わんばかりに自分の横を指すので、そちらに座り彼と話しをする。

ミスター・リチャードの息子が、以前、「ラガの文字を作っていて、それはすばらしい」と言っていたことがあるが、彼、ヴィラレオがその人物だった。名刺をもっていて、（その名刺は）裏は英語、表がそのラガ文字、これは砂絵から作り出したものだと思う、で書いてある。シンボルマークも砂絵。彼はアリグで **Melanesian Institute of Philosophy and Technology** を作り、そこでこうしたカスタム学校を営んでいるようだ。そうした話をしているうちに、彼はナカマルに入ろうと言い出した。誰もカヴァを作っていないし、ファファリギ（石蒸し料理）の用意もしていないのにどうしたのだろうと思いながら中へ入る。



写真2 ラフシヴァトゥのナカマル<sup>(10)</sup>

二人がけのベンチがあったが、ヴィラレオがそこに座り、横に來いと言う。今日のカヴァの宴の主役はやはり俺とヴィラレオの二人かと思ひそこに座ったが、ヒルダーは他のみんなと一緒に座る。と、一人が立ち上がって、ビスラマで話しかどうかをヴィラレオと相談してからビスラマで話し出す。なんと会議が始まったのだ。彼らと一緒にいた男たちは、北部ラガの人々ではなくバンクスやアンブリュムのチーフたち。ヴィラレオが彼らに話をし、それに対する質問を受けるというミーティングだったのだ。サイモンの言っていたカヴァの宴とはまったく違うものだった。それに紛れ込んでしまったのだ。しかし、ヒルダーもヴィラレオも俺が行くのを待っていた節がある。そのへんがよく分からない。だいたいヒルダーが町で俺に声をかけたけど、ヒルダーとは彼女が学生のときに1度会っただけだ。町で見かけても誰か分からないから、普通は「ヨシオカ」と声をかけないだろう。誰かにヨシオカがサントにいと聞いていたから、顔を見てわかったのかも知れない。いずれにしても、ひよんなことで会議に参加することになった。ヴィラレオは海外の会議に何度も出ているようだ。おそらく大学も出ているのだろう（実際は出ていない）。チーフ・サイラスの言うことは正しかったと話し始めた。ヴァヌアツの経済はだめになってきた。10年計画で始まりもう3年経ったが良くなならない、など現状を批判した後、先住民議会について話し始めた。どうやらこれがこの会議の主題のようだ。ヴィラレオは、経済的独立も政治的独立もできていないという。そして、みんなはヴァツ（ヴァヌアツの通貨）を欲しない、マットやシェルマネーや豚の牙など伝統的な通貨を太平洋の通貨にするべきだと主張する。これが彼の主張のようだ。伝統的な貨幣を復活し、独自の通貨にしようというのだ。

彼の後に俺にもしゃべれというので、グローバリゼーションについて話す。グローバリゼーションではなくグローカリゼーションで行く必要があると言おうと思ったが、ヴィラレオの話が、白人のファッション（やり方）になびくのはよくない、という趣旨だったので、ローカリゼーションについて話す。文化的独立についていつも考えていると前置きして、「グローバリゼーションは白人のファッションに従ったもので、世界が白人のファッションに覆われているが、それとは別の道もある。それがローカリゼーション。ローカルとはそれぞれの島のことで、ローカリゼーションとはそれぞれの島のカスタム（伝統）を重視すること。カスタムをグロウンアップする必要がある」という内容。

続いて、ヒルダーが話す。彼女は今フィジーにいるが、世界各地を回っていて、その話には説得力がある。ヴァヌアツは貧しい国ということになっているが、みんなは貧しくはない。貧しいのは政府だ。みんな土地をもっており、生活できる。お金だけを見ているから貧しいと思えるのだ、と言う。先住民議会は今回で3回目となる。マルファトマウリ（全国チーフ評議会）は、白人のファッションに従っ

ている。それぞれの島から選挙で選ばれ、どこの島が何人ということになっている。そのため、島の利害集団のようにになっている。先住民議会はチーフの議会で、人々がチーフだと考えている人が参加する。西パプアや東ティモール、ソロモン、などでは争いが起こっているがヴァヌアツは平和だ。何も平和をコントロールする組織がないのに平和を保っている。その理由は、チーフたちがカスタムをつかさどっているから。チーフがそれを作り出している。ドクター・ヨシオカがいうように、グローバリゼーションが押し寄せてきており、それは新しい植民地主義 (*niufala kolonialism*)だ、と説明した。彼女はヴィラレオと違って、世界の知識に裏づけされたことを言う。

その後質問に移る。最初の質問は先住民議会と全国チーフ評議会はどう違うのかという質問。これはまさに良い質問だった。ヴィラレオはあまりまともに答えられない。ヒルダーが横から上記で書いたような説明をした。次は質問のような質問でないような内容。最後に発言を求めたチーフも、「三人」の発言に感謝するという内容のもの。三人の中に、もちろん俺も入っている。会議がおわり、ヒルダーが「カヴァでも」と言い、ヴィラレオが金を出して買いに行かせることになった。そこにウィリーがやってきた。上（の場所）でカヴァを準備していると言う。「彼らと少し話したら上に行こう」と言う。（結局ヒルダーやヴィラレオとカヴァを飲むのではなく、最初に誘われていた通り）ウィリーと一緒にサイモンの家にいった（そしてカヴァの宴に参加した）（2003年9月17日）。

この会議は、ヴィラレオが中心になっているような形態をとっているが、話の内容から考えるに、どうやら先住民議会のアイデアはヒルダー・リニが中心になって進めているようである。基本的には、独立以来続いている全国チーフ評議会が、最初のうたい文句とは違って、伝統的やり方では行われておらず、結局は選挙によって選出されるなど西洋的なシステムに基づいて運営されており、伝統的な手続きからは外れているうえに、大きな成果を上げていないというのがヒルダー・リニの視点なのだ。

ところで、会合の中でヴィラレオが言っている「チーフ・サイラスの言うことは正しかった」というのは、説明をする必要がある。チーフ・サイラスというのは、筆者が滞在していたラブルタマータ村のチーフで、筆者のヴァヌアツでの「父」にあたる。彼は、独立前は大きな商売をしており、さらに、植民地行政府のアセッサ（現地人補佐役）を務めていた。独立前夜は、独立運動の指導者であるウォルター・リニの政党に自らも帰属し、北部ラガでの独立運動の推進役の一人でもあった。独立後は、階梯制の規定に基づいて豚を殺し、記章を購入することで最上階梯に到達し、チーフとしてその権勢をふるっていた。彼は、ウォルター、ハム、ヒルダーらの父であるハパー・リニと親しく、ウォルター・リニに自分の意見が言える数少ないチーフの一人であるとともに、彼の娘は、第11代首相でその後何度も副首相となっているハム・リニ



の妻になっているため、ハム・リニとは北部ラガの伝統に従えばバリガ関係をもつことになる。バリガというのは、お互い助け合わねばならない特別な関係のことである(11)。

さて、チーフ・サイラスは、ヴァヌアツ全土に名の知られたチーフであるにもかかわらず、全国チーフ評議会には参加していない。その理由は、全国チーフ評議会は投票によってすべてを決定するからである。彼は言う、「自分が賛成し全国チーフ評議会でも承認された事項が、もし国会で否決されたとするとどうなる。それでおしまいだ。そのときチーフの力はどこへ行ってしまうのか？チーフに力は残らない。しかし、投票で決めるのでなければ力は残り、チーフとして別の道を探ることができる」。彼は、西洋的な民主主義システムを否定するのである。伝統についてはサイラスに聞け、といわれるほど伝統文化には深い見識をもっており、それをもとに、伝統的なチーフの在り方を現在にも適用しようとする考えをもっているのである(cf.吉岡 1998:403-412)。

さて、2011年のフィールドワーク時に、ヒルダー・リニの家で彼女とヴィラレオを見かけた。先住民議会についての説明はあちこち回ってうまくいっているということで、彼女に言わせれば大成功だということだった。そして2019年にヒルダー・リニにインタビューしたときには、次のように説明を受けた。つまり、先住民議会はサラバラレオ(*Sarabalaleo*)と名付けており、2人のチーフが代表を務め、活動は2007、2009、2015、2017年とやってきた。2017年は、国連の下部組織として先住民議会のフォーラムの大会をラヴァトマンガム村で行った。このフォーラムも二人の代表を置いており、一人は自分でもう一人はジョエル。この先住民議会に集まるチーフたちは、ヴァヌアツ全土で47のネイションからそれぞれ出てくる。それぞれの代表のチーフたちは、投票ではなく伝統的なやり方で決められるが、何人でも代表として出るのは構わない。この47の区分は言語単位に基づいているが、言語はもっとあると思う。この47のネイションの一つが北部ラガの言語圏で、それがトゥラガ・ネイション。ネイションというのは地区のような意味だが、それぞれ伝統が違うので、ネイションと呼んでいる。トゥラガ・ネイションではカスタム学校やカスタム銀行などいろいろな試みを行っており、他のネイションでもそれぞれの伝統に従ってそうした試みをするようにいっているが、なかなか進まないのが実態だ、と言うのだ。

このヒルダー・リニの話から以下の三つの点が浮かび上がってくる。一つは、ヒルダー・リニは、トゥラガ・ネイションを先住民運動として捉えているのではないということである。実際に彼女は、「トゥラガ・ネイションは間違っただけでトゥラガ・ネイション運動と呼ばれるがそうではない。ネイションは、北部ラガという地域を指しているにすぎないのであり、その意味でも政治的な集団にはならない」と強調しているのである。二つ目の点は、先住民議会の北部ラガの代表の一人としてヒルダー・リニは参加しているが、ヴィラレオは参加していないということである。三つめは、ヒルダー・リニは先住民議会を、国連の先住民関連の活動と連動させて考えているということである。

ある。国連では、先住民(indigenous people)に関する作業部会を設けて、1993年に設定された「国際先住民年」をはじめ、1995年から2004年までの「世界の先住民の国際の10年」の制定、2007年の「先住民の権利宣言」など、次々と先住民の言語、文化、生活を守るための宣言を採択してきた。ヒルダー・リニの先住民議会も、この線上に設定されているといえるのである。また、彼女は、2000年から2004年まで、フィジーにある国際NGOの太平洋利害関連資源センター(Pacific Concerns Resource Centre)の所長を務めていたが、その最後の年の2004年には、国連の核拡散防止批評会議(UN Nonproliferation Review Conference)の太平洋地域代表を務めており、国連とのかかわりも深いのである。

#### 4 豚の銀行

トゥラガ・ネイションの最も大きな特徴は、伝統経済の自立を訴え、伝統的通貨である豚やマットを預金するシステムを作り出したことである。ヴィラレオは、「ヴァヌアツは、極めて悪い状態となった西洋経済体系を捨て、白人が到来する前から存在していた交易と交換の伝統的体系を復活させる必要がある」と主張する<sup>(12)</sup>。そしてそれを実現するために、ラヴァトマンゲム村では、生きた豚や豚の牙を蓄えるタンブニア(*tañbunia*)と呼ばれる「豚の銀行」を創設したのだ(cf. Huffman 2005)。この銀行はペンテコストの中に14の支店をもち、銀行に預けられた豚の牙は利息付きで貸し出されるが、その結果、牙を預金した者には15%という高金利が支払われているという。銀行では小切手帳を発行しており、口座間のやり取りを実際の豚を移動することなしにできるようになっているという<sup>(13)</sup>。ヴィラレオは言う、「システムは我々のもっている自然の資源、つまり土地や海からの産物で動いている。全てのものが価値をもち通貨へと変換される。我々の目的は、我々の社会には貧困がないということを確認することだ」<sup>(14)</sup>。

もう一つの伝統的通貨である赤マットも同様に預金できるが、ヒルダー・リニに言わせると、それはペンテコスト島の中中部から始まったという。島の中中部ではパンダナスで編んだマットを赤く染める技術が発達しており、北部の人々も織ったマットをわざわざ中中部までもって行って支払いをして赤く染めてもらう。したがって、マットを預ける銀行が中中部から生まれたというのは理にかなったことである<sup>(15)</sup>。マットを預ける銀行に関して、ヒルダー・リニは、「タンブニアというのはマットや貝貨を預ける銀行にはふさわしいが、豚の牙を預ける場合は、タンマラヒ(*tañmarahi*)と呼ぶのがいい」という。確かに、タンブニアというのは結婚式のときに新婦が持参するもので、その中には大量のマットが詰められているのだ。一方、マラヒというのは財産一般を指し、マラヒの入ったかご(*taña*)という意味で、豚に関する銀行はタンマラヒと呼ぶのには合理性があるが、ヴィラレオはそうは考えずに、タンブニアという言葉をか

ストム銀行に使っているようである。



写真3 ラヴァトマンゲム村の豚の銀行(2019年)



写真4 豚の銀行内の様子(2019年)

さて、これらの伝統的通貨の価値を統一するために、トゥラガ・ネイションではリヴァツ(*livattu*)という単位が設定されている。それは円形に弧を描いた豚の牙(図1でいえばリヴォアラ)に匹敵し、ヴァヌアツの現在の通貨であるヴァツ(*vt*)でいえば、18000vtに匹敵するという。ラガ島で長らく教員を務めてきたアンドルー・グレイは、ラヴァトマンゲム村を訪れてヴィラレオにインタビューを行っているが、それによる

と、次のような発言がヴィラレオから発せられている。つまり、「世界の他の銀行は失敗していくが、我々の銀行はそうはならない」。「タンブニア銀行は堅固だ。というのは、それは伝統に基づいているから」。また「世界の各国は自身の伝統を見つめねばならない。そして伝統銀行の自分なりの形態を作り出す必要がある。全ての国でそれぞれのやり方がある」とも述べている<sup>(16)</sup>。

一方、オーストラリアの SBS テレビの 'Dateline' で放送された **The Best Piggy Bank** でも、ヴィラレオの直接、間接の言葉が描かれている。彼は、「将来、我々の銀行は世界中のすべての外国の銀行と連携して、経済的な意味ですべての人々を助けようと思う」と述べている<sup>(17)</sup>。そして、ペンテコストとその近隣の島々の 1 万人の人々がここに伝統的な財を預けている、と言うと同時に、クレジット（信用貸し）、デビット（即座引き落とし借り方）、そして複利という概念までもが伝統的な経済に存在していた、と説明している。豚の銀行は、そうした伝統的な仕組みを採用しているということなのだ。

この点について補足説明が必要だろう。北部ラガの伝統体系では、様々な交換のやり方が存在する。一つはフロ(vuro)と呼ばれるやり方で、これはもらったものと等価のものをいつか返すことが要求される。その意味で借金（ビスラマで det）という訳がつくことが多い。しかし村の商店で「つけ」で買い物をした場合も、フロという概念が適用される。これはクレジットといえなくもない。ただし、店の側がクレジットのように後で対価を回収できると考えていても、買った側は、対価を支払わねばならないがいつか自分ができるときでよいと考えることも多い。こうしたことから店の経営が成り立たなくなることもしばしば生じる。

一方、ブグ(bugu)というやり取りは、階梯制と関連した豚のやり取りの場合にだけ見られるが、もらったものに利子をつけて返却するというやり方である。階梯制を具現するボロロリ儀礼で用いる豚は、ある等級以上はブグというやり方で誰かから贈与してもらい必要がある。そして、その豚に対しては、相手からもらった豚と同等級の豚に加えて 7 頭の豚を利子として与え返さねばならない。それを行う儀礼では、さらに別の人物からブグの形で豚をもらわねばならず、それに対しても利子をつけて反対給付をする必要がある・・・という具合に続いていく。複利と呼べるわけではないが、似たようなシステムだといえなくもない。また、デビットの仕組みも伝統的な体系にあるというが、これは、無理に探せば購入する(voli)という概念と関連しているといえなくもない。北部ラガで「購入した」といっても、その場で対価を支払うとは限らない。「豚はまだ渡していない」というセリフがしばしば聞かれるが、これはフロのようにいつか返却するというのではなく、必ず返却するが今は手元がないので、後で支払いを渡すという意味になる。北部ラガに伝統的にある交換のやり方は、クレジット、デビット、複利という経済概念とは合致するものではないが、まったく異なったものではないように見えるというのが実情だろう。そしてそれが、豚の銀行のもっている



近代の経済的な仕組みは実は伝統文化の中にあったのだから伝統経済といえる、という正当化を導き出しているといえる（吉岡 1998:176-183）。



写真5 豚の銀行に預けられている豚の牙(2019年)

さて、このオーストラリアのテレビ番組の中でヴィラレオは、豚の牙などを現在流通している通貨に換算すれば総額 14 億オーストラリアドルになると述べているが、その管理体制、窃盗などに対する保安はどのようにしているのかという質問に対して、面白い答えをしている。彼は、「もし盗みに入ったら、その者が知らないうちに伝統的な防御体制が彼を殺す。誰もなぜ死んだのかわからない。その者が死んでいるのを見るだけ。なぜ死んだのかわからない。これが伝統的防御体制だ」<sup>(18)</sup>。ヴィラレオは超自然的な罰則を念頭に置いている。世界各地でヴァヌアツの伝統経済について講演してきたヴィラレオが、超自然的な力に対してどの程度確信をもっているのは推し量ることはできないが、彼は、近代的な仕組みに伝統的な原理を見出し、近代性とは全く相いれないと思われる伝統的な様々な仕組み、因果性などを現代に蘇らせようとしていると捉えることができよう。

## 5 2019年のラヴァトマンガム村

2018年、エスピリトゥ・サント島のルガンヴィルで、たまたま知り合ったアンバエ島出身の男性とトゥラガ・ネイションについて話をした。彼は、農業関係のオフィサーをしている関係で各島を巡っており、ラヴァトマンガム村にも行ったという。しかし、村に入ることを拒否されたというのだ。この話を聞いて、筆者はトゥラガ・ネイ



ションは排他的な運動体として機能しているのだと思った。そして、単に訪問するだけではなく、あらかじめ許可を取らなければラヴァトマンガムには行けないと痛感した。

ラヴァトマンガムへの入村のために、同年、ヴィラレオと近いとされる人物に連絡をとり入村したい由を告げると、獄中のヴィラレオと連絡を取ってくれたようで、彼は問題ないといっているという返事もらったが、そのメールには、カスタム学校に入学するのなら何がしかのお金が必要だということが書いてあり、ラヴァトマンガム入村の目的をもっと知らせてほしいということだった。そしてその由を知らせたが、連絡はそれで途絶えてしまった。そこで、翌年のフィールドワークのときに、ヒルダー・リニに会うことにした。以前の家から移り住んだということだったので、首都在住の筆者の「兄弟」の一人を通して彼女と連絡をとってもらい、8年ぶりにヒルダー・リニと再会した。彼女はいろいろとアドバイスをくれたが、ヴィラレオが捕まってからラヴァトマンガムでは活動が休止しており、伝統学校もやってないし豚の銀行も活動していないという。村に集まっていた人々は、結局自分の村に引き上げてしまったらしい。そして5家族の女性たちだけがいるという。村を見るだけなら問題はなく、ヴィラレオの兄弟がラヴァトマンガム近くの内陸の村にいたので、彼を訪ねて一緒に海岸に降りていくと良いという。アリグ地区まではトラックの道ができていたので、それで行っても良いという。ただ、村では銀行を開けて見せてくれる可能性はあるが、写真を撮ることは難しいという。以前に断ったことがあったようだ。



写真6 ラヴァトマンガム村

北部ラガに到着してラブルタマータ村に落ち着いてから、同村在住の「兄弟」の一

人と一緒にヴィラレオの兄弟・ヴィランガルのいる村を目指した。隣村のロルトンまで踏み分け道を歩いて、そこからトラックを頼むことにしたが、20年ほど前にはロルトンまで30分もかからずに歩けたところが、今は1時間以上もかかった。トラックに乗ってからも、比較的時間がかかった。ヴィランガルのいる村でいったん下車し、村の集会所で挨拶をする。北部ラガでは挨拶をするときには、現在握手をするのが一般的になっているが、この村では互いのおでこをくっつけることが挨拶だった。10分ほどで挨拶が終わって、その村の若者も数人乗せて再び出発。トラックに乗っていた時間は、トータルで2時間ほどだっただろうか、ようやくラヴァトマンゲム村に到着した。1974年にラヴァトマンゲム村よりも南のアリグ地区の村に、ラブルタマータ村から歩いて行ったと述べたが、そのとき4時間で行っていることを考えると、道の悪さからくるトラックのノロノロの速度が推察できるだろう。

さて、トゥラガ・ネイションは排他的な運動体になっているかもしれないと想像していたので、ラヴァトマンゲムは柵や塀のようなものに囲まれた村だと考えていた。しかし柵も塀もない普通の村落だった。ヴィラレオがいなかったために銀行は機能していない。しかし彼の兄弟であるヴィランガルが銀行のカギを保管しており、その内部を見せてくれた。当初写真はだめだといっていたが、結局は許可され、大量の豚の牙が天井からつるさされている銀行内部の写真を撮ることができた(写真4と5)。またヴィラレオが教授を務めていた学校も、閉校の状態だった。写真6は村の中心になる場所で、正面の建物に掲げられている垂れ幕には、トゥラガ・ネイションの中心的テーマである **KASTOM EKONOMIK INDEPENDENS** (伝統経済の自立) の文字が見える。また、同じ垂れ幕には **VANUAROROA**(アロアの土地) の文字も見える。ここでもアロアという言葉が使われているので、トゥラガ・ネイションではラガの北部、あるいは北東部を表す言い方として定着しているようだ<sup>(19)</sup>。

さらに同じ垂れ幕に2009年の文字が見えるので、2009年に開催された伝統経済の自立に関する会合のものであろうと思われる。写真6の建物の左に映っている看板のようなものは、もう一つの看板と対になって、ラヴァトマンゲム村の象徴のような役割を演じている。その二つの「看板」の写真を拡大して、写真7と写真8に掲載してある。アヴォイウリによって書かれた文字が見えるが、図4を用いて欧文アルファベットに書き直せば、写真7の文字は **Wangnggatagaro** となり、写真8の文字は、**Mwasigi i tamata tam tu** となる。アルファベットによるラガ語表記とは多少異なるが<sup>(20)</sup>、前者の意味は、「いつでもあるカヌー」、後者は「我々は真実と平和に立脚する」となる。



写真7 看板1



写真8 看板2





写真9 ラヴァトマンゲムのナカマル

ヴィランガルの村からやってきた者数人を除くと、本当に数人の女性と子供たちがいるだけだった。しかし、これら女性たちによって丁寧に管理されているため、廃村という雰囲気は微塵もなかった。ヴィラレオの復帰を待っているのであろう。ヴィランガルの指示のもと、筆者、筆者の「兄弟」、トラックの運転手、そして若者たち、村にいる女性や子供たち全員が村のナカマルで昼食を食べ、その後、筆者と筆者の「兄弟」だけがトラックにのってラヴァトマンゲム村を離れた。

## 註

(1) リニ兄弟の「リニ」という名前は、彼らの父親であるハパー・リニの名前からとられている。北部ラガには本来姓という概念はなく、ハパーはクリスチャン名、リニは彼のラガ語による個人名である。しかし、植民地統治時代の行政が、子供たちが誰の子であるのかを知るために父の個人名をあたかも姓のようにしてリストを作ったといわれている。その結果だろうと推測されるが、多くのところで、子供のクリスチャン名に父の個人名をつけて言及するようなやり方が広がってきたのである。なお、ラガ語による個人名はすべて意味のある単語からとられており、リニ(*lini*)というのは正しくリンギ(*lini*)であり、それは「そのままにさせる」という意味をもっている。ウォルター・リニがマスコミで登場するようになって、*Liñi*のñの上のバーが英語表現にないために省略されたことから、*Lini* となり、ウォルター自身も自

らの著書などでそれを使うようになったのである。本論では、本来リングと書くべきところを一般的な表記に従ってリニとしてある。

(2) 伝統を指すラガ語には、*aleñan vanua*という言葉があるが、それは「土地のやり方」を指している。一方、西洋近代が侵入してきたときに人々が意識した伝統というのは、ピジン語、つまりビスラマでいう「カスタム」である (cf. 吉岡 2005:187-239)。本論では、ビスラマ表記とラガ語表記のものが混在する書き方をしているが、両者を区別するために、ビスラマのものはイタリックにせず、ラガ語のみをイタリック表記にする。

(3) 男性の階梯は、下からタリ、モリ、リヴシ、ヴィラ（あるいは発音の仕方によってはフィラ）と名付けられている。豚を殺して階梯を登り新しい階梯に到達すると、その階梯名にちなんだ「豚名」と呼ばれる伝統的な名前を名乗ることができるのであり、最上階梯に到達した男たちはその階梯にちなんだ豚名、例えば、ヴィラドロ、ヴィラワハイなどの名前で言及される。なお、ヴィラレオは最上階梯に到達する前からこの名前を名乗っているようである。一方、これとは別に女性の階梯もあり、下からメイ、ミタリ、ミサレ、ミタライ、モタリという五つの階梯がある。モタリラヴォア・ヒルダー・リニの最初の名前モタリラヴォアは、この女性の最上階梯モタリにちなんでつけられた名前である。

(4) 人々は現実には、赤小マット 10 枚よりも赤大マット 1 枚の方に価値を置く。しかし、赤大マットがないので赤小マット 10 枚で代用するということは、望まれはしないが、可能であるといえる。従って赤小マット 10 枚の価値 ≤ 赤大マット 1 枚の価値というのが正確なところだろう。

(5) ヴァヌアツ各地で伝統的な政治体系は異なる。しかし、伝統的な手続きで政治リーダーになった者は、一様にビスラマでチーフと呼ばれている。

(6) ”Discoveries of the Unexpected” というウェブサイトにも、きれいに清書されたアヴォイウリが掲載されている。 <https://gekbarna.tumblr.com/post/103150824123/the-photo-above-and-documentation-of-avoiuli-below> 参照。なお、アヴォイウリというのはアヴォイ (*avoi*: 話す) とウリ (*uli*: 絵、描く) からなる造語である。

(7) この学校は、その後、Melanesian Institute of Science, Philosophy, Humanity and Technology (*bwatielen borebore, vovoraga, mwaguana i gotovigi*) と改称され、さらに 2014 年 10 月 3 日のヴァヌアツ・デイリーポスト紙によると、Melanesian-Global Institute of Science, Philosophy, Humanity and Technology (Vanuatu Daily Post 2014) と改称されている。ヒルダー・リニによると、その学校は 6 つのレベルからなっており、最後の二つのレベルは大学と同等級だというのが、2019 年現在、その学校は機能していないので、詳細を聞くことができなかった。

(8) インディジナス (*indigenous*) という言葉を日本語に訳すのは難しい。国連で用いられる *indigenous* の訳として「先住の」「先住民の」が定着しているが、ヴァヌアツ



の場合には、この言葉を「先住民」と訳すには多少の問題がある。というのは、先住民という日本語には、マイノリティで支配されてきた人々というニュアンスが付いて回るが、ヴァヌアツの先住民であるメラネシア系の人々は、独立後は、まさしく支配権をもつマジョリティとしての位置を占めている。したがって、ヒルダー・リニらが用いる *indigenous parliament*(ビスラマで *indiginas palamen*)における *indigenous* は、日本語にするとときに、「先住」という意味合いよりも「土着」という意味合いをもたせた方が適切だと考えられる。しかし、国連の動きと連動したこの運動を表記するために、訳の統一が必要と考え、ここでは「先住」という方を採用したが、文脈によって「土着」という訳語を与えた場合もある。

- (9) カヴァというのは、コショウ科の灌木で、その根に含まれる樹液を飲むという慣習が、ミクロネシアの一部、そしてヴァヌアツからポリネシアにかけて広がっている。
- (10) エスピリトゥ・サント島のルガンヴィルは、第二次世界大戦のときに、アメリカ軍が基地として建設したキャンプをその出発点としている (cf. 吉岡 2016a)。軍は、多くのかまぼこ型宿舎を建設し、一時は 10 万人が生活できる都市を建設した。現在のルガンヴィルにも、その宿舎の残骸が残っており、ラフシヴァトゥではそれをナカマル (集会所) として利用している。なお写真 2 は、先住民議会とは関係がない。
- (11) 北部ラガは規定婚の社会であり、規定としては、男は自らマンビと呼ぶカテゴリーの女性とだけ結婚できる。私 (男) の娘をマンビと呼ぶ男は、潜在的な娘の配偶者であるが、ルールに従えば、彼は私の妻をニトゥ (娘) と呼ぶ。つまり、私と彼はお互いに娘を交換して妻にしているという形態となり、こうした両者は互いのことを「私のバリガ」と呼ぶ (cf. 吉岡 1998 : 71-99)。
- (12) A.Gray “Piggy Banking”. ([www.andrewgray.com/pacific/piggybank.htm](http://www.andrewgray.com/pacific/piggybank.htm))。ヴィラレオの発言にしばしば、「悪い状態の西洋経済体系」という表現、あるいはそれに類する表現が登場するが、これらは、2007 年から 2010 年にかけて生じた世界金融危機の影響が反映されている。
- (13) A.Gray “Piggy Banking”. ([www.andrewgray.com/pacific/piggybank.htm](http://www.andrewgray.com/pacific/piggybank.htm))。2007 年 7 月 4 日 BBC ニュース (<http://news.bbc.co.uk/2/hi/asia-pacific/6266274.stm>)。
- (14) A.Gray “Piggy Banking”. ([www.andrewgray.com/pacific/piggybank.htm](http://www.andrewgray.com/pacific/piggybank.htm))。
- (15) 筆者は、ル・クレジオの著書の書評「ル・クレジオの『ラガ―見えない大陸への接近』を読む」の中で、マットの銀行は中部で生まれたというル・クレジオの説明を批判し、それは北部のトゥラガ・ネイションの動向と関連していると述べたが (吉岡 2016b:63)、これは間違いであり、ここに訂正をしておく。
- (16) A.Gray “Piggy Banking”. ([www.andrewgray.com/pacific/piggybank.htm](http://www.andrewgray.com/pacific/piggybank.htm))。
- (17) The Best Piggy Bank (<http://www.journeyman.tv/film/5507>)。このフィルムは 2012

年に最初にオーストラリアで放映されている。

(18) The Best Piggy Bank(<http://www.journeyman.tv/film/5507>)。

(19) VANUAROROA は、VANU+AROROA と考えれば「アロロアの土地」という意味になるが、VANUA+ROROA と捉えれば「有名な土地」という意味になる。ちなみに、古い言い方では、ラガ島南部はアロアロ(Aroaro)と呼ばれている。

(20) 後者の中の *tam tu* (*tam*: 「我々 (聞き手を含む)」を意味する代名詞 *ta* に現在時制を示す *-m* がついたもの、*tu*: 「立つ」を意味する動詞) に関していえば、[m]の直後に[t]の音ではなく[d]の音が来るのが一般的なもので、綴り字にする場合は、*tam du* となり、過去の時制がついた「我々」を示す *tan* の場合は *tan tu* となる(Yoshioka 2013:6-15)。一方、前者の文字の中の *wangngga* は、[ng]と[ngg]の二つの音が表記されているが、[ngg]には[ng]の音が含まれているので、一般的な綴りでは *wangga* (ラガ表記では *waḡa*)とすべきであろう。

## 引用文献

久保忠行

2020 「環流する知識と経験—難民の「帰還」とシティズンシップ—」 錦田愛子編『政治主体としての移民/難民—一人の移動が織り成す社会とシティズンシップ』明石書店、pp.169-191.

Huffman, K.

2005 *Traditional Money Bank in Vanuatu: Project Survey Report*. Vanuatu National Cultural Council.

Vanuatu Daily Post

2014 “Chief Vireleo explains Tuvatu Currency.” 10月3日号

Vanuatu Statistics Office

2017 *2016 Post TC Pam Mini Census. Vol.1 Basic Tables*. Vanuatu Statistics Office.

Yoshioka, M.

2013 *The Story of Raga: David Tevimule's Ethnography on His Own Society, North Raga of Vanuatu*. The Japanese Society for Oceanic Studies Monograph Series No.1

吉岡政徳

1998 『メラネシアの位階階梯社会—北部ラガにおける親族・交換・リーダーシップ』風響社

2005 『反・ポストコロニアル人類学—ポストコロニアルを生きるメラネシア』風響社

2016a 『ゲマインシャフト都市—南太平洋の都市人類学』風響社

- 2016b 「ル・クレジオの『ラガー—見えない大陸への接近』を読む」『近代』115:45-65.
- 2018 『豚を殺して偉くなる—メラネシアの階梯制社会におけるリーダーへの道』  
風響社